



先日、山田火砂子監督の『一粒の麦』—荻野吟子の生涯—を観ました。主演の若村麻由美は気品ある一途な吟子像を好演していました。荻野吟子は「近代日本における最初の女性医師」ですから、歴史上の人物と言えますが、知名度はあまり高くないようです。渡辺淳一著『花埋み』（荻野吟子の伝記小説）も読み、吟子の苦悩にますます胸が痛くなりました。

荻野吟子(1851(嘉永4年)－1913(大正2年) 埼玉県熊谷市出身)は裕福な名主の家の娘に生まれ、裁縫、書、茶の湯、生け花などすべてをたしなみ、小柄で美しく、賢い、努力家でした。17歳で結婚し、夫により、性病に感染します。当時、医学はまだ、未発達で、治療が手遅れになりがちです。病気は人に知られたくないことでもあります。まして、性病となれば、罹患者の品性、名誉、評判が絡んでくるのです。病身となり、結婚3年目の19歳で、離縁が決まり、実家で療養する身となりました。吟子の実家、婚家、共に熊谷の在郷の旧家でしたから、外聞を避け、秘密のままでした。病気が治らず、漢方医の勧めで、東京で西洋医学の治療を受けますが、医者は男ばかりでした。吟子には陰部を男性の目にさらし、手当を受ける事は、耐え難いほどの恥ずかしさ、苦痛であったのです。診察後に、子どもは産めない身体になり、患部は対症療法で処置していくという結果が知らされました。それらの体験から、即ち、家制度の束縛、男性優位の結婚、夫の無責任、女性差別、診察の不安、治療の難しさを身をもって体験し、吟子はこの悲しみ、苦しみ、屈辱を乗り越えたい、そのためには女性の医師が必要であると痛感し、医師になろうと決断しました。

吟子は22歳から、私塾で学び、東京女子師範学校を首席で終え、医学校は男性にのみ門戸が開かれていましたが、優秀さのゆえに、つてを得て、28歳で入学し、ただ一人の女学生として、パワハラ、セクハラの嵐のなかで、自らの願いを達成するために、果敢に勉学に励み、34歳で国家試験に合格し、初の女医として開業することができました。長い道のりでしたが、初志貫徹し、夢が叶い、どんなに嬉しく、誇らしく、また、家族の支えに感謝したことでしょう。



彼女は研究熱心で親切な情け深い医師でしたが、努力しているように見えない人には厳しく要求する生真面目な性格でした。懸命に病人を助けようと願っても、医療ではどうにもならない、貧しい弱い人々がいることに気づきます。女性による日本最初の社会運動である基督教婦人矯風会の一員となり、衛生などの啓蒙活動にも取り組みます。また、神は男と女を等しい人間として創造されたと明言するキリスト教に触れ、教会で洗礼を受け、熱心に聖書を読むようになりました。

そんな折に年若い神学生から熱烈に求愛を受けました。純真な信仰を持ち、対等な人間として真剣に吟子と向き合う彼と会話を楽しむうちに、吟子は初めて愛に突き動かされたのです。互いに神の前であって、愛し、愛されることの喜びと充足感に満たされたのです。友人知人家族すべての反対を押しつけて吟子は13歳年下の神学生と40歳で結婚してしまいます。やがて夫は北海道の原生林を開拓し、キリスト教徒たちの理想郷を作りたいと願い、単身北海道に渡ります。不可能と思える彼の夢に、吟子は共感します。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない(ヨハネ 15:13)と吟子はその御言葉に命を賭けました。一年後に吟子も夫を追い、仕事を捨てて厳寒の未開の地へ移住します。夫の理想郷を拓きたいという熱情は烈しいものの、あまりにも過酷な現実があり、夫は倒れて亡くなりました。

再び吟子は医者として働き始めますが、短い結婚生活の間に医学、医術は進み、吟子は取り残されていました。けれども吟子が初めて「ガラスの天井」を破ったことにより、吟子に続く女性達が出て、1900年には東京女子医学校が創設されました。吟子は一粒の麦になったと言えるでしょう。